チェコスロバキアのオリエント学
—その伝統と近況—

伊　藤　義　教

（I）序　　曲

チェコスロバキアにおけるオリエント学の序曲は，遠く溯れば Stítné の Tomáš (1335—1409) によるバルラアムとヨサパト物語のチェコ語訳によって奏でられた—— というよりも，ヨーロッパ大陸の内陸国として海を持たないこの民族の，東方へのあこがれは，そのように古く，かつ熾烈であった。それからまもなく，1400年頃にはマルコ・ポーロの旅行記がチェコ語訳され，以下，近東やカイロ，コンスタンチノープルなどへの旅行記などが相ついで登場しているが，なかでも興味のあるのは，1614年にあらわれた Anti al-Qoran である。コーランといえば，すでに1143年にはラテン語訳されているので，中欧にも早くから知られていた。チェコのプロテスタント貴族，Budov の Václav Budovec はコーランをチェコ語に抄訳するとともに，それへの駁論として執筆したものが，すなわちこのコーラン反論である。一方またチェコスロバキアはハプスブルグ王国の一部として，オスマン帝国と交渉をもち，この結果トルコ語文献がこの国の東部に伝存して今日に至り，それらが逐次刊行されて歴史へのよりよき理解に資していることも，忘れてならないことである。しかし，オリエントに対するこの民族の関心が一個の学として体系化されるには，かなりの時間がかかったし，また，われわれの限られた紙幅では，その時間を追うことも許されないので，今は前世紀以降に限定して，チェコスロバキアにおけるオリエント学の伝統と近況とを，主として学者とその業績にしぼって，紹介することとしよう。なお，ここでいうオリエント学とは，今日，中近東とよばれる地域に関する，人文科学系統の諸学問を意味するので，多くの業績と輝かしい学匠とを擁するこの国のインド学やその他の東洋学も，いまは除外するほかはない。

（II）楔形文字学と象形文字学

さてチェコスロバキアのオリエント学といえば，だれしもヒッタイト学の父 Bedřich

Hrozný (1879—1952) を想起するだろう。ロズニーは父からも大きな感化を受けたが，特に興味のあるのは，かれがグランマ・スクール時代，その先生であった Justin Václav Prášek (1853—1924) の存在である。プラーシェクといえば，その名著 Geschichte der Meder und Perser bis zur makedonischen Eroberung, Gotha 1906-10 をもって海外に名を博したが，国内でも幾多の歴史論文をもって東方への一般的関心を高揚した人。ロズニーはこの先生から学童時代深い感化をうけたのであった。ウィーン大学に遊学中，オリエントの古語と歴史を修め，卒業後ベルリンに転じて Zum Geldwesen der Babylonier に取掛り，さらにロンドンでは未刊のアッシリア語テキストと取組んでいた。ウィーン帰還後大学図書館で仕事をしていたが (1902—18)，のちには同大学でセム語の講義もした。この間の作は Das Getreide im alten Babylonien, Wien 1913 となってあらわれている。これよりさき，ベルリンのアッシリア学者 Hugo Winkler は 1901 年 Boghazköi で多数のヒッタイト泥章を発掘，その殆んどはコンスタンチノープル博物館に保管されていたが，ロズニーはドイツ東洋協会からその出版を委任され，1914 年 4 月からそのうちの楔形文字泥章の筆写にとりかかったところ，同年 8 月第一次大戦勃発のため辞してウィーンに帰った。しかし，筆写した大量の資料を携え帰ったので，それについて解読の業をすすめ，句や語形の比較分析の方法を用いて，同泥章の言語を解明，その成果を Hethitische Keilschrifttexte aus Boghazköi in Umschrift und Übersetzung, Leipzig 1919 として世に問うた。その間，かれは 1918年プラハのカレル大学の教授となったが，本書の出版後，トランス・ヨルダン，シリア，トルコなどの近東で発掘に従事，やがてヒエログリフによるヒッタイト・テキストの解読にすすみ，その成果を Les inscriptions hittites hiéroglyphiques, Prague 1932-37 にまとめて発表した。在来の業績を分析し，未解読の多数のヒエログリフのよみかたを提唱し，かくして最大最重要な碑文約九十の殆んど完全な訳出に成功するとともに，文法の概要をも提供している。Die Entdeckung eines neuen indoeuropäischen Volkes im alten Orient, Prague 1933 は教授の業績の全貌を一般向きにしたもの。学界に成果を認めしめるため欧洲各地に遊説，1930年に至ってはじめてこれに成功している。第二次大戦中，教授は原インド文字やクレタ文字の解読にあたったが，前者の一部の成果は Archiv Orientální（これも教授によって 1929 年に創刊された季刊誌で，ながい間編集長をも兼ねていた）に，後者は Les inscriptions crétoises, Prague 1948 に発表されている。そのライフワークの全容を示すものが Nejstarší dějiny Přední Asie, Indie a Kréty（西アジア，インドおよびクレタの古代史），Praha 1949（英独仏語版も相つい

であらわれた）で，古代東方の諸文明を比較し相互の関係に論及した，綜合的労作であった。

広義の楔形文字学者としてのロズニー教授の学灯は，カレル大学教授 Lubor Matouš (1908—) と，門下生としてヒッタイト学を専攻する Vladimír Souček (1928—) とによってつがれている。マトウシュ教授は Lexikalische Tafelnserien der Babylonier und Assyrier, Berlin 1933 の著者として名を出すほか，シュメール，アッシリア，アッカード諸語や，シュメール・バビロンの文化史や経済史に関する多くの論文を発表し，前記 Archiv Orientální の編集にも当たっている。

以上のほか，この（Ⅱ）の部門にはプラハの東洋研究所，いわゆるオリエンタル・インスチチュートにも多くの俊秀が拠っている。もちろん，この施設はチェコスロバキアの科学アカデミーに所属する。われわれが取扱おうとしているオリエント学に関係する範囲には ①古代近東と ②近代近東の二部門がある。①の首脳は Untersuchungen zum altbabylonischen Erbrecht, Praha 1940 と The Code of Hammurapi, 1954 の著者 Josef Klíma (1909—)。前者は古代法の貴重な文献，後者は有名な法典を一般に普及する上に大きな役割を演じている。氏の下にいる Václav Cihař (1900—) は Syntaktische Forschungen auf dem Gebiete der hethitischen Sprache (Archiv Orientální) 1955 をもって聞こえる，ロズニーの高弟である。このほか，この ①古代近東部門には，同門の Ladislav Krušina-Cerný (1907—) のほか，Stanislav Segert (1921—)，Ladislav Zgusta (1924—) が拠っているが，その専攻分野は楔形・象形部門でないので，②近代近東の部門とともに，次節（Ⅲ）で取扱うこととしたい。

最後に，チェコスロバキアの象形文字学における特異な存在として逸することのできないのは František Lexa (1876—) である。数学，物理学，哲学，心理学などを修めたが，心理学的研究をもってついに古代エジプトのヒエログリフの研究にすすみ，ベルリン，ストラスブルクに学んで，カレル大学における斯学初代の助教授となったのが 1919 年，そして 1927 年にはついに教授となったという変わり種。La magie dans l'Egypte antique, de l'Ancien Empire jusqu'à l'époque copte, Paris 1925 および Obecné mravní nauky staroegyptské (Enseignements moraux généraux des anciens Egyptiens), Paris 1926-29 はともに三巻から成り，いまもユニークな地位を保持しているが，このほかにも古代エジプトの数学や天文に関する小論文のあることは言うまでもない。しかし，かれの真のライフワークは Grammaire démotique, Prague 1949-1951 七巻の大著，世界のエジプト学界にその比を見ぬ偉業とされ，1952 年チェコスロ

バキア国家賞（第一級）を授与された。これでもわかるように，教授の本領は古代エジプト言語の研究にある。国内向けでは文学関係のテキストを多数訳出したほか，Veřejný život ve starověkém Egyptě（古代エジプトにおける公生活），Praha, Ceskoslovenská Akademie Věd, 1955-56 二巻があり，豊富な資料を挙げて古代エジプト人の生活を追求したものとされている。オックスフォード大学エジプト学教授 Jaroslav Černý (1898—) とカレル大学助教授 Zbyněk Žába (1917—) とは門下の高足。前者はヒエラティク・エジプト語の専攻，後者は古代エジプト天文学とプタホテプ (Ptahotep) の＜格言＞に学界の関心をよんでいる。かくして，チェコスロバキアのエジプト学はまさしくレクサ教授によって創設されたといわねばならぬ。

（Ⅲ） 他の印欧語，セム語，トルコ語等の諸学について

この分野では，チェコスロバキアの東洋学は，前節で取扱った部門を，古さにおいて圧している。というのは，セム語のうちでヒブル語と聖書の研究は最も古く，Jan Chyba（ラテン語名 Joannes Fortius Hortensius）が 1541 年，カレル大学で神学の一部門としてヒブル語に関する最初の講義をはじめ，以後，プラハの上流社会ではヒブル語聖書の勉強が伝統的に重んじられてきたからである。1579-93 年に出版されたチェコ語訳聖書，いわゆる Kralice-Bible には，この伝統的成果がもられている。すべてがドイツ化された暗黒時代たるハプスブルグ王朝治下でも，この伝統は強く脈打ち，18世紀後半に至ってチェコ語とチェコ学界の再生を待つのである。しかしこの伝統が真にオリエント学として定着されたのは，カレル大学教授 Rudolf Dvořák (1860—1920) によってである。教授はアラブ，ペルシア，トルコ，ヒブル，中国の諸語に通じた特異な存在であったが，それら各分野への関心の高まりと幾多新資料の発見とによって，この八宗兼学的な学風はそのままには受継がれず，分化し専門化されるほかはなかった。といっても，同教授の学風には特に注目すべきものがあった。それは研究業績を民衆のなかに流がすということで，以後チェコスロバキア学界の注目すべき一特色となっている。ではその専門化したエキスパートはといえば，便宜上これを ⓐ 前記東洋研究所，ⓑ カレル大学，ⓒ その他の大学の三にわけて，簡単に紹介しよう。まず ⓐ であるが，上述したようにここには ① 古代近東と ② 近代近東の二部門が本稿に関係のある分野としてとりあげられる。そしてその①についても一部はすでに述べたところ(p.59) であるから，ここでは，そのさい後段に保留しておいた三氏について述べることとしよう。まず L. Krušina-Černý であるが，その近業には The Day of Yahweh and Some Re-

levant Problems, Prague 1948 があり，セム語学者 S. Segert は，後説 Otakar Klíma との共同執筆でヒブル語とアラム語との文法を出したほか，いわゆる死海経巻に関する Zur Habakuk-Rolle aus dem Funde von Toten Meer (Archiv Orientální) 1953-55 を最も重要な業績とする篤学。L. Zgusta は黒海周辺の古代語，特にスキゥタ，サルマタ，リュディアの諸語を専攻，その Die Personennamen griechischer Städte des nördlichen Schwarzmeerküste, Praha 1955 は幾多の新しい知見に光彩を放っている（本書については西南アジア研究第五号 p. 28 参照）。つぎは ② 近代近東の部門であるが，これを領導するのは Otakar Klíma (1908-)。博士がヒブル・アラム語文法に共同執筆したことは前説したが，古代および中期ペルシアの言語および文献～文学史のエキスパートとして，Jan Rypka 博士の編集に成る Dějiny perské a tádžické literatury, Praha 1956 に古代および中世のペルシア文学を分担執筆しているのみならず，その Mazdak. Geschichte einer sozialen Bewegung im sassanidischen Persien, Praha1957はチェコスロバキア・アカデミーの出版にかかる名著である。Věra Kubíčková(1918—) 女史はクリーマ博士の同僚で19世紀のペルシア文学，Ivan Hrbek (1923—)はスラブ史に対するアラブ語文献，Cyril Horáček (1896—) は16世紀のトルコ戦役にチェコの果した役割，Karel F. Růžička (1914—) はバントゥー語，それも特にスワヒリ語の文法と，それぞれ専攻は多彩である。

では ⑥ カレル大学はどうなっているかというと，ここにはセム語域に Alois Musil (1868—1944)，Rudolf Růžička (1878—1957)，Felix Tauer (1893—) その他があり，イラン・トルコ語域に Jan Rypka (1886—)，Josef Blaskovics (1910—) があって，それぞれ異彩を放っている。まず A. Musil であるが，これは斯学に志す人は初心者でも知っている高名な人物，いまさら説くまでもないだろう。エジプトとトランス・ヨルダンへの旅行 (1896) にはじまり，メソポタミア遠征 (1914—15) に終わる幾多の現地踏査はあらゆる艱難に耐えて反復続行されたもの。それだけに1898年には，はや，カリフ Al-Walīd 二世 (A. D. 8世紀の前半) の夏宮 Ḳusayr ʿĀmra をはじめとする諸旧址の発見があったというふうで，毎回の旅行には必ず豊富な収穫があった。ベドウィンと起居をともにしてまでも繰返し企てられたいわゆる Arabia Petraea，中部メソポタミア，北アラビアなどへの遠征はまず Arabia Petraea, Wien 1907-8（トランス・ヨルダンの完全な記述）となってあらわれたが，Ḳusejr ʿÁmra, Wien 1907，それからニューヨークの American Geographical Society から 1926-28 にわたって出版された The Northern Heǧáz, Arabia Deserta, The Middle Euphrates, Palmyrena, Northern

Neǧd, The Manners and Customs of the Rwala Bedouins（ムシル教授はこのベドウィンの一員兼シエイクとして遇され，その名も Musa ar-Rweili として非常な便宜をえている）など一連の著書となって結晶した。アラブ語学者，人種学者，地理学者および地図作成者として近東の空白を数限りなく埋めたこの大旅行家も，出発点は聖書学で，このためさらにエルサレムの l'École Bibique とベイルート大学とに学んでいる。しかしこの留学中，パレスチナ，トランス・ヨルダン，北アラビアに幾度も旅行を試み，これが上記のようにかれの方向を決定づける因となった。また教師としての経歴もオロモウツ (Olomouc)，ウィーンとめぐって，プラハのカレル大学の芸術学部にたどりついたのは，やっと 1920 年であった。

このムシルとならんで，やはりアラブ語～イスラーム学に重きをなしたものは，その二同僚カレル大学教授 Rudolf Růžička (1878—1957) と同じく Felix Tauer (1893—)。前者はセム語音 ʿ(ghain) のアラブ語起原説のチャンピオン。Konsonantische Dissimilation in den semitischen Sprachen, Leipzig 1909 はこの領域に関心をもつほどのものはみな披見しているはずである。しかし，こうした語学ばかりでなく文学史にも関心がふかく，その著 Duraid ben aṣ-Ṣimma. Obraz středního Hedžázu na úsvitě islámu（ドゥライド・ベン・アッ・シンマ。イスラーム黎明期における中部ヘジャーズ），Praha 1925-30 において，ムハンマドに抵抗したベドウィンの一首領の生涯と行蹟とを深く分析して，イスラームの興起がどのような背景のなかに行なわれたかを明きらかにした。カレル大学で教職50年，アラブ語学，セム語学から聖書学と幅ひろくわたったが，かれの着眼のえらさは，聖書学をキリスト教やユダヤ教のドグマから解放された独立の学として終始せしめようとつとめた点にあろう。現在同大学でセムおよびアラブ語を講じているKarel Petráček 講師 (1926—) はかれの門弟である。これに対し，Felix Tauer教授の方はやや色彩が異なり，イスラーム世界の歴史が専攻。Les manuscrits persans historiques des bibliothèques de Stamboul (Archiv Orientální) 1931 - 32 はそういう方面での業績であり，Histoire de la campagne du sultan Suleyman 1er contre Belgrade en 1921. Texte persan publié avec une traduction abrégée, Prague 1924 はチェコ学界からのオスマン帝国史への重要な寄与であるが，Histoire des Conquêtes de Tamerlan intitulée Ẓafarnāma par Niẓāmuddīn Šāmī, Praha 1937 (Ⅰ. Texte persan). 1957 (Ⅱ. Introduction, commentaire, index) は教授の最大の労作であろう。これらの業績は，教授のアラビヤン・ナイトの原典訳（カルカッタ本から訳出。全八巻。1955年完結）とともに深遠な語学力をも証してあまりあるものである。つぎはカレル大

学におけるイラン・トルコ語域（タウエル教授と一部重複するが）であるが，ここにはトルコ語と近代ペルシア語とを，新旧にわたって渉猟した博学 Jan Rypka 教授がおり，筆者との交渉もナチスのズデーテン侵攻以前からで，与えられた数々の忠言，贈られた幾多の論文は，省みて筆者をジクジたらしめるもののみ。ウィーン大学の学生時代からこの方面を指向したが，その方面で専門の講義を始めたのは1927年，カレル大学で講座を担当するようになってからというから，ずいぶん長いあいだ不遇であった。トルコ語関係としてはまず Beiträge zur Biographie, Charakteristik und Interpretation des türkischen Dichters Sábit, Praha 1924 と Báqí als Ghazeldichter, Praha 1926 があり，それぞれの古典トルコ詩人の人と業績を分析した最初の企てであるが，教授は歴史の方面でもすぐれた業績を示し，オスマン帝国治下のハンガリアの歴史ならびにペルシアの外交史に関する貴重な文書を発表したり，またハンガリア，スロバキア，ウクライナ，インドのそれぞれとトルコとの関係に関する多くの論文をも執筆している。この写本資料の公刊は教授の弟子である，同大学助教授 Josef Blaskovics (1910—) によって引きつづき行なわれている。また転じて近代ペルシア語関係の分野をみると，これはまた驚くべきほどの，質量兼ねそなえた業績である。Hellmut Ritter と共同で校定編集した教授の Heft Peiker. Ein romantisches Epos des Niẓāmī Genǧe'ī, Praha～Paris～Leipzig 1934 といえば誰れ知らぬものもない，ペルシアの詩人ネザーミーの有名な作品であるが，教授はまたこれを，Vladimír Holan, Jaroslav Seifert および Svatopluk Kadlec の協力をえてチェコ語訳している (Sedm Princezen〔七王女〕, Praha 1939; 1952)。この校定版以後，最近の大著 Dějiny perské a tádžické literatury (ペルシアとタージクの文学史)，Praha 1956 の前後に至るまでに発表された多くの論文は，博士の造詣の深さを証してあまりあるもの——この文学史にも，みずからイスラム・ペルシアの文学史を19世紀の終りまで取扱い，またタージクのそれにも論及している。なお，この文学史やその他の最近の業績については，西南アジア研究第5号，pp. 30. 32 参照。同じくカレル大学のセム語関係で逸することのできないのは，シリア語のスペッシアリスト Jaroslav Sedláček (1860—1925)，アッシリア学者でバビロニア法のエキスパート Václav Hazuka (1875—1947)，旧約学の M. Slavomil Daněk (1885—1946) および Vojtěch Šanda (1873—1953) で，殊にシャンダは列王紀上下の詳註 (Münster 1911 - 12) ならびに Moses und der Pentateuch, Münster 1924 をもって旧約学に寄与するとともに，多くのシリア語テキストを編集して近東言語の研究にも資するところが少なくない。

これまで述べたプラハの ⓐ 東洋研究所や ⓑ カレル大学のほかにも，チェコスロバキアのオリエント学の伝統はつよく脈打っている。ⓒ それらのなかでも，オロモウツ (Olomouc)，ブラティスラヴァ (Bratislava) 両大学がことにそうで，前者には Histoire de l'Ancien Testament, Olomouc 1923 の Bartoloměj Kutal (1883—) と，Les notions eschatologiques des Babyloniens, Olomouc 1941 のアッシリア学者 Antonín Kleveta がなお活躍中。またブラティスラヴァ大学には碩学 Ján Bakoš 教授 (1890—) がアラブ語とセム語を担当している。教授はシリアの Bar Hebraeus (13世紀) の Mᵉnārat̲ Qud̲šē (Le candélabre du sanctuaire) を Patrologia Orientalis, Paris 1930-33 に発表するとともに，以後かれに関する論文数篇を Archiv Orientální に載せたが，やがて La psychologie du Grégoire Aboulfaradj dit Bar Hebraeus, Leiden 1948 をもって，この人物を解明する業績に一つのピリオドを打った。そして，この長大な業績につづき 1956 年には Psychologie d'Ibn Sīnā (Avicenne) d'après son oeuvre Aš-Šifā, Prague 1956 を上梓，テキストを校定して仏訳を添えた。このブラティスラヴァ大学には，このほか，神学部に Ján Lajčiak (1875—1918) があって光彩を放っていた。さらに，ベルノ (Brno) 大学では歴史学助教授 Jan Kabrda (1906—) がバルカン史に関するトルコ語文書の編集と解明にあたっている。

(Ⅳ) 結　　語

以上，はなはだ簡単な概観であって，筆者は，高く評価さるべきチェコスロバキアのオリエント学の伝統と現状を，正しく紹介しえなかったのではないかを，切におそれている。この十年前後のあいだに，この国のオリエント学は世界の学界から，三度までも祝福される機会をもった。一つは Bedřich Hrozný (1879—1952) の古稀記念特集号 (Archiv Orientální XVII/XVIII, 1949～50—Symbolae Hrozný)，つぎは František Lexa (1876—) の七十五年の賀寿特集号 (Archiv Orientální XX, 1952—Diatribae Lexa)，最後は Jan Rypka (1886—) の古稀記念論集 Charisteria Orientalia, Praha 1956 でチェコスロバキア・科学アカデミーの出版にかかるもの。それぞれの分野における内外の学究がこれらに寄せた幾多の論文は，これら高名な学人の業績を讃える趣旨に出たものであるが，兼ねてこの国におけるオリエント学の現状を正当に評価するものというべく，筆者によるささやかな紹介を超えて，直接読者に語りかけるものがあろう。ただ，問題はこの国のオリエント学が，今後どのように展開するかである。前記の栄誉はいずれも，いわばアヴァン・レジームの所産に冠せられたものであるとも言いうるから，そ

れがそのまま斯学の将来を語るものではないかもしれない。とまれ，幅広い層と歴史の厚みとを有するこの国のオリエント学の未来を予言する資格は，筆者にはなさそうである。

もはや紙数もつきて，関連ある重要な出版書や飜訳書，各地の研究施設，諸大学の歴史や機構（カレル大学はボヘミア〔すなわちチェヒ Čechy〕の Karl 四世によって1348年に創立され，栄光と苦難の歴史を秘めた，中欧最古の大学である），前記諸学究がそれぞれの大学で所属している部局などに言及することもできなくなった。そこで最後に一言——以上の諸学府や研究所はもちろん，そのほか，たとえば他のプラハの大学をも含めると，ここで取扱うべき範囲には属しないが，インド学やシナ学，日本学などに，高名な巨匠の名が数々見い出される。そしてそれにつけても思うのは，わが日本の学界である。言霊のさきほうとか言われるこの国に，オリエント（西南アジア）のどの部門にも，それを擁する講座が，ほとんどの大学にないということは，かえりみてうらさびしい次第である。

本稿は，Otakar Klíma 博士の寄贈にかかる Dušan Zbavitel: Oriental Studies in Czechoslovakia, translated from the Czech by Iris Urwin, Prague 1959 に主としてよった。そのさい，チェコ語版をも求めたが，それは上梓されていないとのことであった。また本書に不足のところは，改めて同博士に指示を乞うた。文尾ではあるが記して深謝の意を表したい。

あ と が き

○本会発足以来会長職にある足利惇氏教授は本年五月還暦を迎えたが，引きつづき会の発展に余念がない。本誌が本号から従前のタイプ印刷を排して活字印刷となったのも，その慫慂と斡旋に基づくもの。よってこれを機に題号も同会長の染毫によることとした。

○クレッセントとサザン・クロスをモティーフにした扉の会章は足利会長の発想をうけて本誌編集部吉田光邦の構成作画したもの。

○集録された論文4篇，学界展望1篇はいずれも珠玉の好篇であることはいうまでもない。以後，本誌はこうした内容で，学術雑誌としての性格を明確にしてゆきたいと思う。研究論文，国内国外の学界動向など諸兄姉のご寄稿を心からお願いしたい。掲載の向には，別刷30部をさしあげる予定である。

○新着図書は本誌第四号以後累積の一途をたどり，本誌掲載の域をはるかに超えたので別方面に期待するほかはなくなった。また紙数の関係から「書評」を割愛したが，海外消息欄が「書評」中の紹介部門を一部担当しているとも思われるので，ご寛恕を願いたい。

○本号印刷については，めんどうな造活その他万般にわたり，あぽろん社の伊藤社主の並なみならぬご好意を仰いだ。特記して謝意を表したい。〔編集部記〕